

ハイデガー『形而上学入門』における自然と人間

——環境倫理学的一考察——

三谷 竜彦

序

現代世界が直面している大きな問題の一つに環境問題がある。その環境問題においてそもそも問題となっているのは、人間の活動によって自然環境に与えられる負荷である。したがって環境問題を解決するためには、そのような環境負荷を減らしたり、あるいは究極的には無くして行くことが必要である。ところでその際の環境負荷とはそもそも何を意味しているのか。自然環境に関わる人間の活動の全てが、自然環境に負荷を与えるわけではない。例えば誰かが一匹の蚊を、あるいは一頭の鯨を殺しても、そのことによって環境負荷は生じないだろう。また河川や湖沼の富栄養化も、その程度が低ければ環境負荷を生じさせることはないだろう。人間の活動による環境負荷は、人間の活動が、自然がそれ自体において持っている独自の秩序や仕組みを損傷、破壊するほどまでに大きな影響を、自然環境に与えることによって生じるのである。したがって人間の活動による環境負荷とは、人間の活動による自然独自の秩序や仕組みの損傷、破壊を意味することになる。そうするとそのような環境負荷を減らしたり、無くして行くということは、人間の活動による自然独自の秩序や仕組みの

損傷、破壊をくい止めること、すなわち自然独自の秩序や仕組みを損傷、破壊する代わりに保護することを、意味することになる¹⁾。このことのためにある立場の環境倫理学は、「土地倫理 (land ethic)」や「生態系中心主義 (ecocentrism)」などの、地球環境全体に最上の価値を置き、人間の価値をそれよりも下位に、しかも他の生物と、場合によっては無生物とまで同等の価値を持つものとして位置づけようとする、いわゆる非人間中心主義的・地球環境全体主義的な環境倫理思想を提案した²⁾。このような考え方が「環境ファシズム」といったレッテルを貼られ、環境倫理学の内部でも非難にさらされていることはよく知られている。確かに自然独自の秩序や仕組みを保護するためには、そのような非人間中心主義的・地球環境全体主義的な立場を取ることが最も容易で最も有効な方法ではあるが、人間を地球環境全体の中に服属する一要素と見なす、あるいはそれへと生態学的に還元するという試みは、人間の存在の独自性を無視した短絡的な方途であると言わざるをえない。人間の存在は決して生態学的レヴェルに還元されうるものではなく、したがってこのような還元を試みは人間を非人間化するものとして、受け入れることは極めて困難である。我々はあくまで人間の存在の独自性を確保した上で、自然独自の秩序や仕組みを保護して行ける方途を探らなければならない。この方途を探り出すことが、本稿の課題である。以下、『形而上学入門』におけるハイデガーの、自然と人間との関係についての考察に即して、この探求を進めて行くことにする。

一 ピュシス

まず『形而上学入門』において自然がどのようなものとして扱えられているのかを確認して行くことにする

が、自然はそもそも、存在を元来意味するピュシス (physis) に属しているので、何よりもまずそのピュシスとはどのようなものであるのかを判明しておく必要がある。

① 立ち現れつつ滞留しつつ支配することとしてのピュシス

ピュシスはまず第一に、立ち現れつつ滞留しつつ支配する *πύσις* (das aufgehend-verweilende Walten) である。

② 現出すること、隠蔽性から歩み出ることとしてのピュシス

ピュシスは立ち現れつつ滞留しつつ支配することとして、なにかんづく立ち現れることとして、現出すること (Erscheinen) ʼ 隠蔽性 (Verborgenheit) から歩み出る *πύσις* である (vgl. GA40, 17, 66, 108-110)。

③ ロコスとしてのピュシス

ロコス (Logos) とは根源的には集約 (Sammlung) ʼ 存在者の集約態 (Gesammeltheit) として、ハイデガールによれば存在を意味する。ロコスは存在として、ピュシスと同じものでもある (vgl. GA40, 139)。

④ ダイノン、ディケーとしてのピュシス

ピュシスは立ち現れつつ滞留しつつ支配することとして、なにかんづく支配することとして、制圧的なもの (das Überwältigende) という意味でのダイノン (deinon) ʼ 不気味なもの (das Unheimliche) である (vgl. GA40, 158f.)。ただしこのダイノンはディケー (dikē) である (vgl. GA40, 169)。ディケーとはロコスとしてフーク (Fug) を意味するが、フークとはまず第一に継ぎ目 (Fuge) や仕組み (Gefüge) を意味し、第二に撰理 (Fügung) ʼ すなわち制圧的なものが自らの支配することに対して与える指図を意味し、そして最後に適合と順応 (Einfügung und Sichfügen) を強いる、継ぎ合わせ整える仕組み (das fügende Gefüge) を意味す

る (vgl. GA40, 169)。ピュシスは制圧的なものという意味でのダイノンとして、このようなフークの意味でのダイケーでもある。

ピュシスは『形而上学入門』において、おおよそ以上のようなものとして捉えられている。それでは自然とはどのようなものであるのかを確認して行くことにしよう。ピュシスとは元来存在を意味するが、同時にまたピュシスの諸特性を持った全体としての存在者 (das Seiende im Ganzen) をも意味する。そして自然とは、この全体としての存在者を意味するピュシスが狭小化されたものである (vgl. GA40, 19)。ところでそもそも狭小化ということが生起しうるためには、元の概念の内に含まれていた何らかの契機が、その元の概念と対立してそれから切り離されるということが、予め生起したものでなければならぬ。ハイデガーによると、ピュシスのそのような狭小化は、テクネー (technē) がピュシスと対立してそれから分離することによって生起した (vgl. GA40, 19)。これはつまりタ・ピュセイ・オンタ (ta physei onta) ˆピュシスによって存在するものと、タ・テクネー・オンタ (ta technēi onta) ˆテクネーによって存在するものとの相互対立 (Auseinandersetzung) ˆ相互分離 (Auseinanderziehen) という事態を指し示している (vgl. GA40, 19)。したがって自然とはこのようなタ・ピュセイ・オンタとして、テクネーによらずに存在する、ピュシスの諸特性を持った存在者であるということになる。

それではテクネーとは何であるか。テクネーとは何よりもまず、人間において独自に見られる現象という意味で人間的現象である。ここで我々は人間の問題に出会う。ハイデガーにとって人間は、確かに自然と同様にピュシスに属するものではあるが、しかしそれと対立するものでもある。これこそがまさに人間の独自の在り方なのであるが、このような人間の独自の在り方を生じさせているものこそが、まさにピュシスとテクネーと

の相互対立、相互分離なのである (vgl. GA40, 123-204)。したがって我々は次に、人間とはどのようなものであるのかをより判明にし、またそこから進んで自然と人間との関係を考察するために、ピュシスとテクネーとの相互対立、相互分離の詳細を判明にしなければならない。

二 ピュシスとテクネー

テクネーはピュシスと同様にデイノン、不気味なものである。このデイノンの、ピュシスとテクネーとへの分化が、ピュシスとテクネーとの相互対立、相互分離となる。ピュシスとしてのデイノンは、先に述べたように制圧的なものである。一方テクネーとしてのデイノンは、その制圧的なものに対して暴力を用いる暴力活動的なもの (das Gewalt-tätige) である (vgl. GA40, 168f.)。これには詩作、思惟、国家建設が含まれる (vgl. GA40, 166, 200)。それではこうした暴力活動的なものとしてのテクネーは、制圧的なものとしてのピュシスに対して、具体的には一体何をなすのであろうか。先にピュシスとは現出することであるということを確認したが、ピュシスが現出することである以上、その現出を受け取る (vernehmen, noein) 何らかの契機が、ピュシスには属していなければならない。この受け取り (Vernehmung, nous) が、まさしくテクネーである (vgl. GA40, 174)。テクネーはそのような受け取りとして、ピュシスの現出のために強要され (genötigt)、必要とされている (braucht) (vgl. GA40, 171f.)。テクネーは暴力活動的に、ピュシスを作品 (Werk) の中へと置き入れることによつて、作品の中でピュシスを開き (eröffnen)、成就する (erwirken) (vgl. GA40, 168f.)。このようにテクネーとピュシスとは相互に対立し、相互に分離しつつも、ピュシスの呼び求めにテクネーが応じるとい

仕方、相互に密接な呼応的關係にあるのである。

人間はピュシスに属していると同時に、テクネーにも属している。人間の独自の存在は、ピュシスに属しつつも、テクネーとしてピュシスに対立しているという、しかもピュシスの呼び求めに応じるという仕方、ピュシスに対立しているというところにある。一方自然はタ・ピュセイ・オンタとして、タ・テクネー・オンタ、すなわちテクネーによって存在するものとしての作品以外の、ピュシスの諸特性を持った存在者を指すのだが、このような存在者は、ピュシスがテクネーを通じて開かれ、成就されるのだから、やはりテクネーを通じて、そのものとして開かれることになる (vgl. GA40, 66, 166, 168)。そうすると自然と人間との關係は、人間が自然の存在 (ピュシス) を開くことによって、自然がそのものとして開かれるというような仕方のものであることになる³⁰。このことは、人間が自然にとって決定的に重要なものであることを意味する。もし人間のテクネーが自然の存在に従順であり、自然の存在を見守り (bewahren)、保護する (wahren) ような仕方であれば、自然はその存在のままに現出することができる。その際自然はその独自の存在において、したがってその独自の秩序や仕組みのままに開かれ、見守られ、保護されうるであろう。我々は人間の存在を自然の存在に還元しなくとも、自然独自の秩序や仕組みを保護することができるのである。しかし他方、もし人間のテクネーにおいて自然の存在が何らかの歪められた姿で開かれるならば、自然もまた歪められた姿で現出することになる。例えば自然の存在が、意のままにできる現存 (verfügbares Anwesen) として開かれる (vgl. GA40, 189f.) ならば、自然もまたそのようなものとして現出することになる。また現代世界が、『技術への問い』の中でハイデガーが分析したような現代技術によって規定されているならば、現代世界において開かれている自然は設備 (Bestand) という在り方をしていなければならない (vgl. GA7, 15-36)。このように意のままにできる現

存や設備として自然の存在を開くことは、ピュシスとしての自然の存在を覆い隠し、それを見守ること、保護することを許さない。ハイデガーによると、このように歪められて開かれた存在は、見かけ (Anschein) としての仮象 (Schein) である。自然独自の秩序や仕組みを保護するためには、この仮象と対決しなければならぬ。

三 仮象

ハイデガーによると、ピュシスは現出することとしてシャイン (Schein) である (vgl. GA40, 107)。シャインとしてピュシスは、第一に「それ自身を集約しつつ、集約態においてそれ自身を立て、かくして立っている」ことを意味する一方、第二に「すでに現に立っているものとして、何らかの前面的なもの、表面的なものを、すなわち見やせる」(Hinsehen) のために差し出されたものとしての何らかの外見 (Ansehen) を「呈示する」ことを意味する (GA40, 191)。ピュシスは第一の意味において、存在者を出現 (Vorschein) へともたらし、非隠蔽性 (Unverborgenheit) へともたらすことを可能とする反面、第二の意味において、存在者が非隠蔽性においてあるところのものを隠蔽し、存在者を、それが本来的にはそれでないものとして現出させることも可能とする (vgl. GA40, 111f., 116)。なぜなら存在者は現出するものとして、それ自身において何らかの容貌 (Ansehen, Ansicht) を持つており、それ自身から何らかの容貌を呈示するのであるが、この容貌が人間によって捉えられる際に、事象それ自体から乖離したものとなりうるからである (vgl. GA40, 111f.)。容貌が事象それ自体の内にかなる支えも持たず、事象それ自体から乖離したものとなるとき、その容貌は事象それ自体を隠蔽する

ことになる。このように事象それ自体、すなわち非隠蔽性においてある存在者から乖離し、それを隠蔽してしまふような容貌が、見かけという意味での仮象である (vgl. GA40, 111f.)。このような仮象は、単に存在者を隠蔽するだけでなく、それ自身を存在と示す限りにおいて、仮象としてのそれ自身を隠蔽する。存在と仮象とは互いに互いを変換し合い、混乱の状態にあるのであり、人間を欺き迷わせるのである (vgl. GA40, 116f.)。それではこのような仮象は、より具体的にはどのようなようにして生じるのであろうか。先に我々はピュシスとテクネーとの相互対立、相互分離について概観したが、ハイデガーによると、受け取りとしてのテクネーはロゴスと同じ性格を持つものであり、ロゴスとの内的な本質共同体の内にあるものである (vgl. GA40, 174-183)。ところでこの場合のロゴスは、ピュシスとしてのロゴス、すなわち存在者の集約態としてのロゴスを意味しない。それは人間において独自に見られるロゴスであり、ピュシスとしてのロゴスを集約しつつ開きつつ受け取ることとして、しかもそのようにして、大局的に見ればピュシスとしてのロゴスへとそれ自身を集約することとして、ピュシスとしてのロゴスと相互対立、相互分離の関係にある。この人間的なロゴスが、受け取りと一つになってテクネーを構成している (vgl. GA40, 174-183)。そしてこの人間的なロゴスは、「根源的には言語 (Sprache) において遂行される」 (GA40, 194)。言語はテクネーとして、ピュシスとの相互対立、相互分離において、ピュシスが語化する (Wortwerden) という仕方では、ピュシスを開く。言語はピュシスをその集約態の仕組みにおいて集約し、開き、かくしてピュシスを見守り、管理する (verwalten) (vgl. GA40, 180f.)。ところがこのように言語、ロゴスによって、人間は暴力活動的にピュシスへと道を切り開き、ピュシスを集約し、開き、受け取りつつ、常に同時に仮象によるピュシスの隠蔽という危険性の内にある⁴。

「人間は自分の軌道の上で身動きできなくなり、切り開かれた軌道の中に絡み取られ、この絡み取られた状態において自分の世界の境域を形成し、仮象の中に陥り、かくして存在から自分を閉め出すことによって、自身によって切り開かれた道へと絶えず投げ返される」(GA40, 166f.)。

「言語が暴力を用いる集約として、制圧的なものの制御 (Bändigung) として、そして見守りとして話すところにおいて、そしてそこにおいてのみ、必然的にまた放縱 (Ungebundenheit) や損失 (Verlust) もある。したがって言語は生起として、直ちに常にまた空談 (Gerede) でもあり、存在の開きの代わりに存在の覆い隠し (Verdeckung) でもあり、仕組みおよびフックへの集約の代わりにウンフック (Unfug) への散逸でもある」(GA40, 181)。

「仮象、すなわちドクサはまず第一に、何かがその中でそれ自身を表示するところのアンジヒト (Ansicht) ；すなわち容貌を意味し、そして同時に人間が持つアンジヒト、すなわち見解を意味する。現存在はそうした諸々のアンジヒトの中に拘束される。それらのアンジヒトは陳述され (ausgesagt) ；言い広められる (weitergesagt) 。ドクサはこのようにロゴスの一種である。諸々の支配的なアンジヒトは、今や存在者への展望 (Aussicht) を遮る。それ自身から現出しつつ、受け取りへとそれ自身を向ける (sich zu kehren) という可能性が、存在者から奪い取られる」(GA40, 201)。

人間は言語、ロゴスによって、ピュシスへと道を切り開き、ピュシスを集約し、開き、受け取るのであるが、自ら集約し、開き、受け取ったピュシスの前面的、表面的な容貌、これは同時に人間自身の見解でもあるのだが、この容貌に固着し、この容貌をピュシスとの関連なしに人間の間だけで流布させ、さらにはこの容貌をピ

ユシスとして捉えることによって、自らをピュシスから閉め出す。このようにして人間は仮象へと陥るのである。

それでは人間はどのようにして仮象を脱し、ピュシスをピュシスのままに見守り、保護することができるであろうか。『形而上学入門』においてハイデガーは、ただ「仮象への混乱から再び持ち直すこと」(GA40, 178)や、ピュシスとしてのロゴスへの聴従 (Horigkeit)、あるいはピュシスとしてのロゴスに追従すること (vgl. GA40, 138) を、説くだけである。もちろんそうしたことを遂行すればよいのであるが、これだけでは具体的にどうすればよいのかが判然としない。我々は一体どのようにすれば、仮象を脱してピュシスを見守り、保護することができるのであろうか。

四 無

我々が仮象を脱してピュシスを見守り、保護するためには、無としての、ピュシスに属する隠蔽性 (vgl. GA40, 117-122) に、着目すべきであると思われる。ピュシスとは隠蔽性から非隠蔽性へと歩み出ることであるが、そうである限りピュシスには、由来としての隠蔽性が必然的に属している。無としての、ピュシスに属する隠蔽性が、ピュシスを見守り、保護するために重要であるのは、例えばジーマンが述べているように、ピュシスの非隠蔽的な面が、人間にとって開かれている面として、人間が意のままにできるものであり、それに対してピュシスの隠蔽的な面が、人間の手の及ばないピュシス独自の面であるからという理由によるのではない⁵⁾。確かにピュシスの非隠蔽的な面とは、人間にとって開かれている面であるが、先に見たように人間は、ピュシ

スそれ自体が現出してくるのをそのままに受け取ることができるのであり、その際にはピュシスの非隠蔽的な面は、決して人間が意のままにできるものではなく、ピュシスの独自性を表現するものである。ピュシスの非隠蔽的な面を人間が意のままにできるようになるのは、ピュシスが仮象によって覆い隠されることによってであり、したがってジマーマンは、ピュシスの非隠蔽的な面を全て、誤って仮象的なものとして捉えているか、あるいは少なくとも、ピュシスの非隠蔽的な面におけるピュシスの独自性を軽視しすぎていると言えよう。無としての、ピュシスに属する隠蔽性が、ピュシスを見守り、保護するために重要であるのは、むしろ仮象とは、そもそも人間にとって開かれていないピュシスの面が、ピュシスから切り離されることによって生じるのであるから、人間にとつて開かれていないピュシスの面を保護して行けるようにすれば、仮象に陥る危険を免れることができ、同時にピュシスをピュシスのままに見守り、保護して行くことができるからである。

ところで仮象もまた、ピュシスに属しつつピュシスを隠蔽するものとして、ピュシスに属する隠蔽性としてある (vgl. GA40, 117)⁶⁹。したがって仮象への道は、それ自身また無への道であるという見かけを呈する。しかし無はやはり仮象とは異なるのであり、それらの間の区別がなされなければならない。そのためには無への関わりを確保しておくことが重要であるが、それはどのようにしてなされるのか。無としての、ピュシスに属する隠蔽性は、「偉大な包み隠し (Verhüllung) および黙秘 (Verschweigung)」である (GA40, 122)⁷⁰。『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と「ライン」』によれば、沈黙する (と) (Schweigen) は言語それ自体の根源であり、この「沈黙することの内において、まず最初に「存在」のようなものがそれ自身を集約し、次いで「世界」として話し出されたに違いなく」(GA39, 218)⁷¹。つまり沈黙することは、ピュシスが非隠蔽的な世界として開かれる以前の、太古の (vorweltlich) ピュシスの隠蔽性を宿しているのであり、このよう

な沈黙することとしての、言語および人間的なロゴスの根源を、したがってテクネーの根源を、取り戻すことが重要である⁹⁾。このことによつて我々は、無への関わりを確保することができる。そして我々はテクネーを、そのような無を匿う沈黙することに基づいてなすことができれば、仮象を脱してピュシスを見守り、保護することができるであろう。

結び

我々は『形而上学入門』におけるハイデガーの思惟の中に、人間の独自性を確保した上で、自然独自の秩序や仕組みを保護して行ける方途を見出そうとしてきた。ハイデガーによれば人間の独自性は、テクネーにおいて初めて存在をそのものとして開き、かくして初めて存在者をそのものとして開くという点にある。このような特性が人間にのみ固有のものであるかどうかについては、議論の余地があるとしても、少なくとも人間が卓越した仕方ですそれをなしていることは確かであろう。そして人間はそれをなすことによつて、また卓越した仕方です仮象に陥つてもいる。現代のテクネーであるテクノロジーによつて、この仮象の力は最高水準に達しているように思われる。仮象が存在者を、したがつて自然をその存在のままに現出させないのである以上、この仮象に打ち勝ち、存在を保護しなければならぬが、そのために必要とされるのは、テクネーのある種の変革である。存在をそのままに開くことができるようなテクネーへの変革が求められている。それはハイデガーにしたがえば、無への関わりを確保しているような根源的なテクネーへの変革として提示される。そのようなテクネーへの変革が可能となれば、自然はその存在のままに、したがつてその独自の秩序や仕組みのままに現出し、

見守られ、保護されうることになろう。もちろん未だ判然としない、変革された新たなテクネーの具体像が、まずはよりはつきりと示されなければならないが、ハイデガーのテクストによる限りでは、そのことはほぼ望みえない。それは我々自身が引き受けて探求すべき課題となるであろう。

注

本文および注の中での、ハイデガーの著作からの引用および参照箇所の指示に際しては、全集版からの場合は、GAに巻数とページ数とを併記することによって、また全集版以外の著作からの場合は、以下の略号の後にページ数を記すことによって、それぞれ示している。

NI: *Nietzsche, Erster Band*, Gunther Neske, 1961

SZ: *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Max Niemeyer, 1993

(1) 環境問題を解決するために、現在様々な技術的な環境保護の試みがなされている。いわゆるクリーン技術の開発や資源保護や化学物質の排出規制などがその例である。こうした技術的な環境保護の試みによって、自然独自の秩序や仕組みはある程度は保護されるであろうが、しかし十全に保護されることはないであろう。なぜならそのような環境保護の試みによっては、現在の自然の、人間の利用に資する道具であるという在り方自体は、決して改められないままであるのだが、このような現在の自然の在り方は、決して自然独自の秩序や仕組みを示すものではないからである。

それはむしろ人間によって押しつけられた秩序や仕組みを示すものである。もし環境問題が、人間の事理的生存の危機にのみ関わるものではなく、自然独自の秩序や仕組みの危機として、自然の存在それ自体の危機に関わるものであれば、技術的な環境保護の試みだけでは、環境問題の解決には不十分であり、自然の存在それ自体に関わる考察が必要となるであろう。あるいは技術的な環境保護の試みによって、自然独自の秩序や仕組みが損傷、破壊された状態のままでも、人間の事理的生存の危機を回避することができ、そのことが環境問題の解決と見なされてしまうならば、そのことによって自然の存在それ自体の危機は覆い隠されて永続化し、その危機の持つ危機性はますます高まることになるであろうから、技術的な環境保護の試みはむしろ弊害を生み出すだけともなりかねない。したがってやはり自然の存在それ自体に関わる考察が是非とも必要である。本稿における考察は、そのような考察の試みの一つとしてなされている。

- (2) 「土地倫理」はレオポルドの用いた言葉であり、「生態系中心主義」はキャリコットの用いた言葉である。これらの環境倫理思想については以下のものを参照せよ——Aldo Leopold, *A Sand County Almanac: With Essays on Conservation from Round River*; Oxford University Press, 1966; J. Baird Callicott (ed.), *Companion to A Sand County Almanac: Interpretive & Critical Essays*; The University of Wisconsin Press, 1987; Callicott, *In Defense of the Land Ethic: Essays in Environmental Philosophy*; State University of New York Press, 1989; Callicott, *Beyond the Land Ethic: More Essays in Environmental Philosophy*; State University of New York Press, 1999.

- (3) この点でハイデガーの思惟は、エコロジカルな意味での非人間中心主義的環境倫理思想とは相容れない。人間の存在様式を他の存在者の存在様式と、例えば自然の存在様式と、同一のものに還元するという仕方での、非人間中心主義は、ハイデガーの思惟にとってはそもそも無縁のものである。もちろんそうかといって、ハイデガーの思惟は決して

人間中心主義ではなく、やはり存在中心主義と呼ぶべきものであるだろう。ただし存在者のレヴェルでは、人間は中心的とは言えないまでも、少なくともある種卓越した地位を占めているというような考えは、ハイデガーの思惟の中に厳然として存在し続けているように思われる。このことは例えば、「存在の家」としての言語を能くするのは人間だけである (vgl. GA9, 313) とか、また存在の本質的にあるもの (das Wesende) をそれ自身の内に匿う「無の社」としての死を能くするのも人間だけである (vgl. GA7, 180) といった、考えの内に見て取られうるであろう。

(4) このような言語の危険性に關しては、『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と「ライン」』の中で、ヘルダーリン解釈に即して詳しく論じられている (vgl. GA39, 59-65)。

(5) Cf. Michael E. Zimmerman, *Heidegger's Confrontation with Modernity: Technology, Politics, and Art*, Indiana University Press, 1990, pp. 224-227.

(6) 仮象としての「ピュシスに属する隠蔽性」と、無としての「ピュシスに属する隠蔽性」とは、『真理の本質について』の中では、それぞれ迷誤 (Irrer) ——この語は『形而上学入門』の中でも、仮象との関わりにおいて述べられている (vgl. GA40, 116f.) ——と秘奥 (Geheimnis) とに対応するであろう (vgl. GA9, 193-200)。またそれらは『芸術作品の根源』の中では、それぞれ遮蔽する「*Verstellen*」と拒絶する「*Versagen*」とに対応するであろう (vgl. GA5, 40-42)。また同様の区別は『存在と真理』の中でも見られ、そこではそれは、一方における覆い隠し、遮蔽、仮象と、他方における秘奥との区別として、述べられている (vgl. GA36/37, 188, 224-226)。

ところで秘奥という概念は、とりわけ 1930 年代前半のハイデガーにとって、存在およびその真理との関係で卓越した重要な意義を持っている。このことはとりわけ『ヘルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と「ライン」』の中で明らかである。例えば以下のように述べられている。

「秘奥は真理の向こう側に存する障壁ではなく、それ自体、真理の最高形態である。なぜなら秘奥を、真にそれがあるところのものであらしめるためには、すなわち本来的存在 (eigenliches Seyn) についての隠蔽しつつある見守りであらしめるためには、秘奥はそのものとして開明的であらねばならないからである」(GA39, 119)。

「存在 (Seyn) は詩作を発現させるが、それは、存在が根源的に詩作の内て己を見出し、かくして詩作の内て己を閉鎖しつつ秘奥として己を開くためである」(GA39, 237)。

「秘奥は親密性 (Innigkeit) であるが、親密性とは存在 (Seyn) それ自体である」(GA39, 250f.)。

「秘奥は言われたものとして、歴史的民族の現存在の内立たなければならぬから、この現存在は存在 (Seyn) の中心 (Mite) から己を規定するはずである」(GA39, 285)。

「秘奥、すなわち存在の中心は、決して恣意的なものではない」(GA39, 285)。

また秘奥という語は『存在と時間』の中でも用いられているが、そこにおいては、世間一般の人 (das Man) の仮象に満ちた在り方に対立するものとして、肯定的に扱われている箇所がある (vgl. SZ, 127) 一方で、「秘奥に満ちた (geheimnisvoll) 」という語形で、良心の呼び声に対立するものとして、否定的に扱われている箇所もある (vgl. SZ, 273f.)。

(7) 『真理の本質について——プラトンの洞窟の比喻とテマイテス——』において、「包み隠された (Verhüllt) 」は、「秘奥に満ちた」保管や保、保存や保つて置 (das geheimnisvolle Aufbewahrt- und Verwahrtsein) と同列に扱われている (vgl. GA34, 142)。また『クルダーリンの讃歌「ゲルマーニエン」と「ラント」』において「包み隠

しは秘奥と一体的なものとして扱われている (vgl. GA39, 119)。したがってこれらのことから、包み隠されていること、包み隠しは、秘奥と一体的なものとして、やはり無としての、ピュシスに属する隠蔽性につながっていると言えよう (注(6)参照)。

(8) 同様のことは他の著述の中でも述べられている。いくつか引用しておこう。

「黙秘としての存在は、また言語の根源でもあるだろう」 (GA51, 64)。

「存在は黙秘される。それは我々によってではないし、我々の意図からでもない。なぜなら我々は、存在を言わないというような意図のいかなる証拠も、発見することができないからである。したがって黙秘はやはり存在それ自体から来ているに違いないということになる。そうするとしかし存在それ自体は、存在それ自体の黙秘であることになる。そしておそらくこのことが、沈黙することを可能にする第一の根拠であり、静寂 (Stille) の第一の根源であろう。

そしてこの静寂の領域内で初めてそのつと語が生成するのである」 (GA51, 77)。

「言語は沈黙することの内に基づいている」 (GA65, 510)。

「言語はその根源を沈黙することの内に持つている」 (NI, 471)。

(9) 沈黙や黙秘という概念は、このように存在との関係においては、無としての、ピュシスに属する隠蔽性につながるものとして扱われているが、『存在と時間』においては、人間との関係において、本来性につながるものとして扱われている。つまり『存在と時間』においては、本来性へと導く良心の呼び声は沈黙しつつあるものであり (vgl. SZ, 271, 273f., 277, 296) また実際に本来的になった自己も沈黙しつつあるものであるとされている (vgl. SZ, 273, 277, 305, 322f., 385)。